

讃良郡条里遺跡

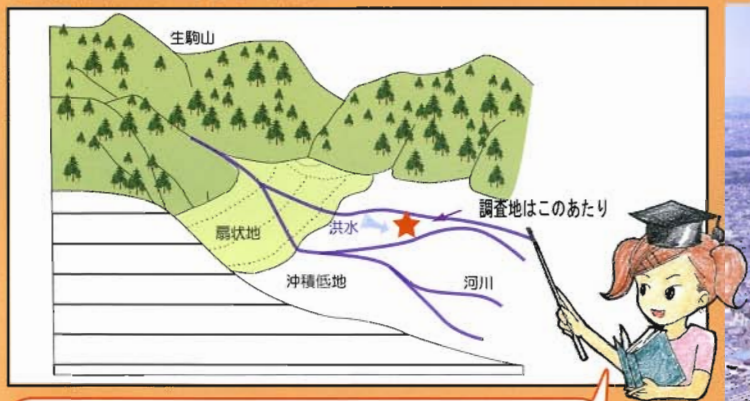
讃良郡条里遺跡とは

「讃良郡条里遺跡」(さらぐんじょうりいせき)は、生駒山系の西側の平野部に東西約1.6km、南北約2.6kmにかけて広がっています。遺跡内では条里地割(じょうりちわり)という奈良時代頃に行われた土地の分け方のなごりが見られ、方位に合わせて伸びる道や河川などがあります。また、過去にこの地域は「讃良郡」(さらぐん)と呼ばれており、今も地名にその名を残しています。そこで「讃良郡」と「条里」を合わせて「讃良郡条里遺跡」の名が付けました。

たびかさなる洪水

遺跡内には、楠根川、讃良川などが西に向かって流れています。これらの川はしばしば洪水を起こしたようで、発掘調査では洪水がもたらした土砂で埋まった田んぼなどが見つかっています。この地で暮らす人たちにとって、大切な田畑や時には家さえ飲み込んでしまう洪水はたいへん恐ろしいものでした。

そんな状況でもあきらめずに住み続けた先人たちは縄文時代から現代に至るまで、数千年にわたる生活の跡(あと)を残してくれています。これらを発掘して調べることで、この地域が育んできた豊かな歴史がわかってきました。



大雨が降ったとき、山の斜面(しゃめん)を削りながら流れてきた川の水は、平坦になったところであふれて洪水を起こします。調査地周辺は生駒山から降る斜面の先端(せんたん)あたりに位置するため、何度も洪水に襲(おそ)われたようで、発掘中に洪水がもたらした大量の土砂が見つかっています。



調査地を南西から見た航空写真です。枚方丘陵に向かって、第二京阪道路の予定地が延びています。

周辺の遺跡と讃良郡条里遺跡

縄文時代、大阪平野の大部分は今のよう陸地ではなく海になっており、縄文時代前期には当遺跡の西半分くらいまでは海でした。中期以降になると、淀川などが運んでくる土砂で三角州(さんかくす)が発達します。生駒山系寄りの高い場所にある遺跡では土器や墓のほか、貝塚(かいづか)なども見つかります。ドングリなどの山の幸や、川の貝や魚などをとって生活していたのでしょう。

弥生時代になると、水田でのコメ作りが始まるため、水田を作りやすい平野部に開拓者(かいたくしゃ)のムラができます。当遺跡でも湿地に近い場所でムラの跡や水田が見つかっています。

古墳時代になると、調査地付近は活発に利用され始めたようで、建物がたくさん見つかります。特に古墳時代の中頃になると、ムラの数が増えます。出てくる土器の中には朝鮮半島(ちょうせんはんとう)で作られるものとよく似たものがあり、渡来人(とらいじん)と関係の深い人々が住んでいたようです。発掘調査では馬の骨や馬具が見つかるため、馬を飼育(しいく)する牧場(ぼくじょう)があったのではないかと考えられています。

奈良時代になると、国による大規模(だいきぼ)な水田整備(すいでんせいび)が行われます。それまで地形に合わせて作っていた水田を同じ大きさの正方形に区画(くわ)するもので「条里地割」と呼ばれます。この土地の分け方はその後も受け継がれ、現代まで残っています。



縄文時代中期ごろの大阪(約5～4千年前) 松田順一郎(2002)を原図として加筆



発見された モノ

発掘中にはたくさんのモノが出土しますが、ここでは、特に弥生時代と古墳時代の出土遺物(いぶつ)を紹介します。



田んぼで見つかったスコップや横槌です。



石の道具類：やりや石剣などの武器のほか、原材料として使用した石が見つかりました。石包丁は稲の穂を刈り取るのに使ったものです。



弥生時代前期の土器：生活用品としての土器類煮炊きをするための鉢や貯蔵用の壺です。



漆？を塗った土器：中部地方でよく見られる土器です。交易などで運ばれてきたのでしょうか。表面に漆のような赤いモノが塗られており、祭祀(さいし)などに使用した可能性があります。

弥生時代のモノ



水鳥をかたどった水差しのような土器。残念ながら頭の部分は見つかりませんでした。どんな頭がつくのか想像してみてください。



鉄のやり・釣り針



勾玉

白玉



有孔円板

白玉・ガラス玉

滑石(かっせき)というやわらかい石で作られた玉がたくさん見つかりました。ガラスの玉と一緒にまつりに使われました。



木製の鞍
(あぶみ)

馬に乗るときに足をかける馬具の一つ、鞍(あぶみ)です。



木で作られた馬の鞍(くら)の一部(背もたれにあたる部分です)作っている途中で壊(こわ)れたようです。



鞍
(あぶみ)

土で馬を形作ったものです。鞍(くら)や鞍(あぶみ)などの表現がされています。



剣をかたどった土製品です。

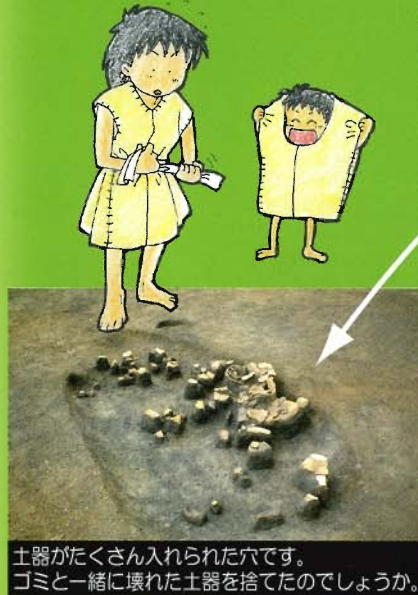
古墳時代のモノ

弥生時代のムラと田んぼ

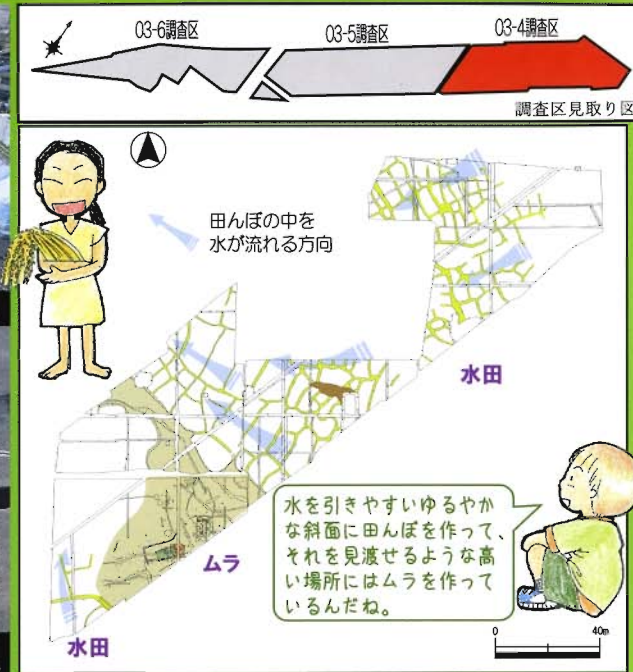
縄文時代の終わり頃から弥生時代の初め頃、水田でのコメ作りが伝わってきました。人々はそれまで住んでいた山あいの土地から田んぼを作るのに便利な平野にムラを移しました。その頃の田んぼは今回の発掘では見つかっていませんが、湿地(しっち)のきわのじめじめした場所を選んで作られていたと考えられます。

田んぼは見つかりませんが、弥生時代前期頃のムラの跡が見つかりました。建物跡の可能性のある穴がたくさん見つかり、周囲には土器を捨てたと考えられる穴や、何かを焼いた穴、土器を棺桶(かんおけ)のかわりにしたお墓と考えられる穴も見つかりました。

穴の中の土に含まれる炭を分析したところ、2700年ほど前のものという結果が出ています。



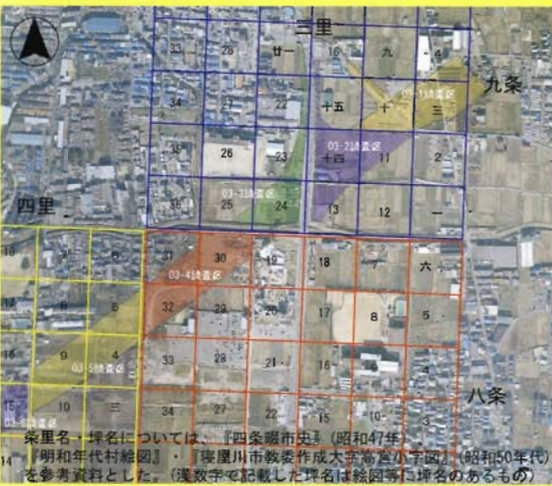
同じ大きさの穴が集中して見つかった場所です。周辺からは土器がたくさん見つかっており、住居の可能性あります。



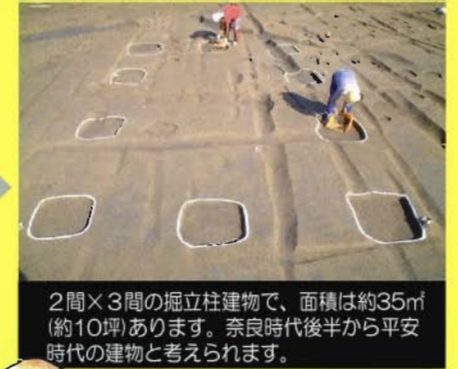
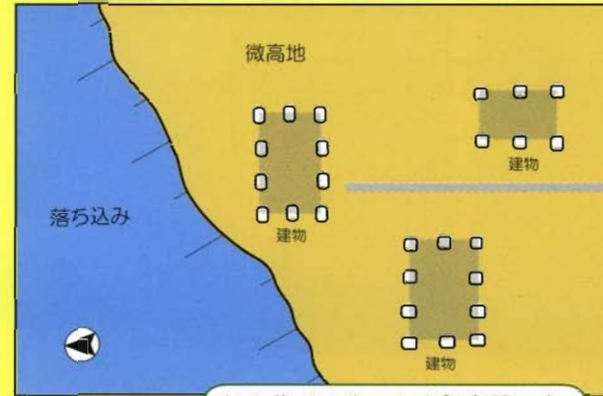
四角く分けられた田んぼ

奈良時代頃になると、今の戸籍(こせき)のようなものができ、6歳以上の農民には田んぼが割り当てられ、租・庸・調(そ・よう・ちょう)という税を納めなければならなかった。公平に同じ大きさの田んぼを割り当てるために土地は同じ大きさの正方形に区切られました。これを条里制(じょうりせい)といいます。

遺跡の周辺を歩いてみると、道や水路、川が東西南北の方位に合っていることがわかります。また、その間隔(かんかく)が109mの等間隔になっていることに気づく人もいるかもしれません。実はこれこそが奈良時代に行われた条里制開発のなごりなのです。



発掘調査によって、この周辺では奈良時代の終わり頃には開発が行われていたことがわかりました。この地域に住んだ先人たちは1200年以上の長い間にわたって、土地の分け方を受け継いできたのです。



板を曲げて作った木製容器の底を抜いて枠に使った井戸だよ。組み合わせる部分は桜の皮を使ってしっかりと留めてあるね。



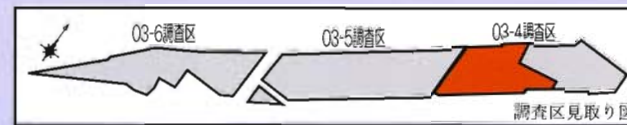
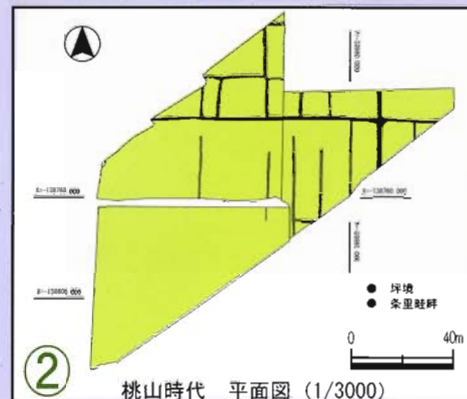
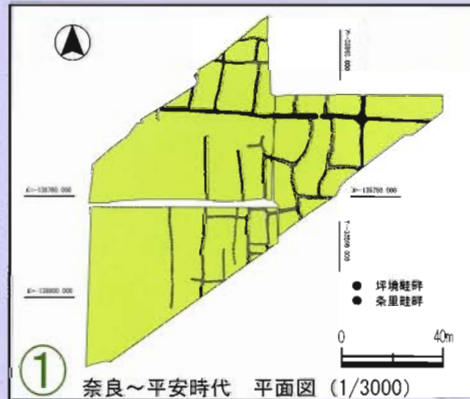
遺跡の西側では田んぼと同じ、奈良時代終わり頃の建物の跡や井戸などが見つかりました。建物には住居の他に倉庫(そうこ)もあり、条里制の開発に関与した人たちの村かもしれません。周辺は今でこそ平らな地形ですが、奈良時代頃には古墳時代にできた谷などが埋まりきらずに残っており、起伏(きふく)のある地形だったと考えられます。そのため、田んぼに向かない乾燥した高い場所に村を作ったのでしょ。

発掘でわかった 田んぼのうつりかわり

奈良時代の終わり頃に作られた田んぼ(①)では、土地を109mごとの正方形の坪(つば)に仕切る坪境(つばざかい)という大あぜが見つかっている。大あぜで仕切られた坪内は地形に合わせて曲がりくねった小あぜが作られている。

鎌倉時代頃から大あぜで仕切られた坪の中を10等分するやり方が採用(さいよう)され、同じ大きさの田んぼがきれいに並ぶ。この状況は桃山時代頃まで続く(②)。

江戸時代になると讃良川が洪水を起こすようになり、坪内をきれいに10等分できなくなる(③)。洪水が運んでくる土砂を盛り上げて作った島畠(しまばた)という畑や、溝のようなため池が作られる。



古墳時代の讃良郡条里遺跡

発掘調査によって、弥生時代の終わりから古墳時代のはじめにかけて大きな洪水が何度かあったことがわかってきました。洪水は大量の土砂をもたらし、起伏(きふく)に富んだ地形を作り出しました。

今でこそ平坦(へいたん)に見える遺跡周辺ですが、古墳時代には湿地(しっち)や谷にはさまれるように、土砂によって盛り上がった高い場所が点在するような地形だったのです。

洪水の土砂によって高くなった場所からは、建物や井戸など当時の人々が生活した跡が見つかります。水はけがよく乾燥(かんそう)した場所を選んで、ムラが作られたのでしょう。低い場所には溝や水路が掘られたり、自然の流路(りり)がでたりしました。こうした低い場所がどのように利用されたかは、まだまだ不明な部分が多いのですが、鞍(くら)などの馬に関連した遺物や馬の骨が多く出土することから、馬を飼育する牧場として使われた可能性も考えられます。

高い場所には建物や井戸がつくれ、人々が暮らしていた



古墳時代の建物と溝です(写真左)。建物の周辺には井戸や、当時のゴミを捨てたと思われる円形の穴があります。すぐ下の写真は、その建物を細かく調査しているところです。



なぜか？大きな甕が逆さまに埋められていました。



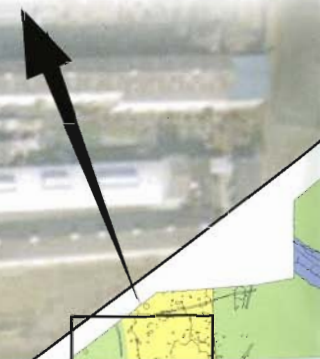
穴の中にはお米を蒸(む)す土器が埋められていました。



飲み水をくみ上げた。木でつくりました。



地面の少し高くなった場所では、古墳時代の建物や井戸が見つかりました。建物の小さなムラだったと考えられます。建物の柱穴には、柱が沈(しず)まないように木のものもありました。

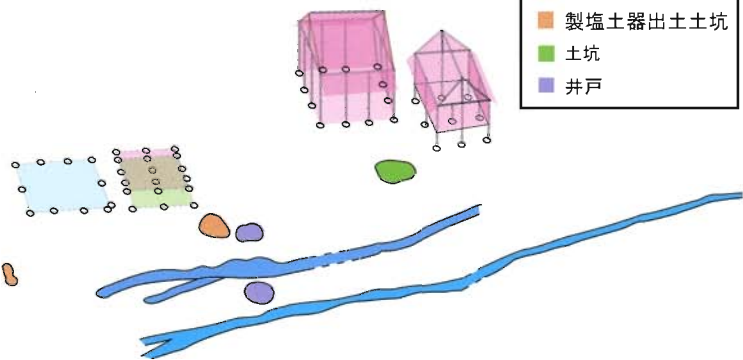


上の写真の建物の南側にある井戸です。丸太を半分に割り、中身をくりぬいて、合わせて井戸枠にしています。丸太は縄(なわ)で縛(しば)られた状態で合わさっていました(写真左)。井戸枠の中にはひょうたと土器が埋まっていた。ひょうたんは水くみ用に使われたのでしょうか？(写真右)

建物周辺のイメージ復原

建物復原図

- 溝
- 製塩土器出土土坑
- 土坑
- 井戸



Q3-6調査区

落ち込みから土器が大量出土



ムラに面した落ち込みです。古墳時代中期(5世紀)までにできた谷状の地形だと考えられますが、鎌倉時代頃(12世紀)まで埋まりきらずに残っていたようです。底からは近辺から捨てられたと考えられる、大量の古墳時代の土器が出土しています。

- は高い所(居住域)
- は低い所(湿地など)
- は溝や河川を示しているんじゃないよ



低い場所では、流路が見つか
器、馬の骨などがたくさん出
いらなくなったものが捨てら
きた馬、石やガラスでつくら
つりの場所として使われるこ



流路の底でみつかった土器や
て捨てられたものが多いと考
のゴミすて場だったのかもし

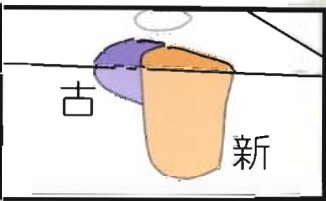
げたのしょう
れた井戸が見つ



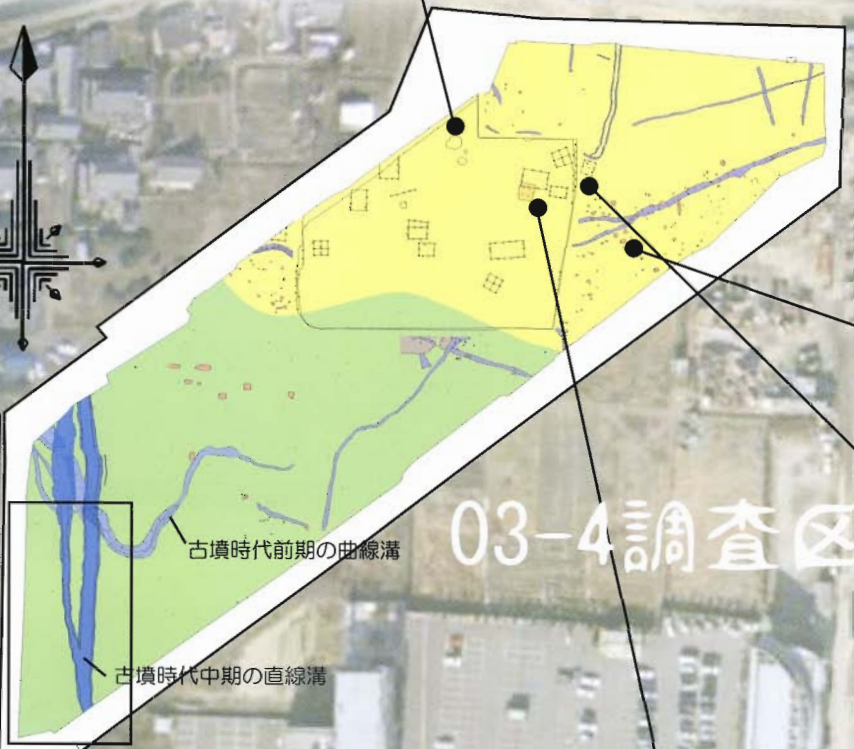
数が少ないので、
板をすえている



大きな穴を掘って、その真ん中に枠をすえた井戸です。
井戸枠には厚い板と薄い板の2種類が使われていて、それぞれを四角く
組み合わせた2重の構造になっています。



発掘調査では丁寧に地面を掘り下げて昔の
人が掘った穴や溝などの跡を探します。
この写真は建物の柱穴を見つけたところ。
2つの穴が重なっているのがわかりますか？
深い方の穴が後から掘られたものです。



03-4調査区

壺がいくつも入れられた穴。
まったく割れていない壺もありましたが
中からは何も見つかりませんでした。
何のために入れられたのでしょうか？



03-5調査区

い場所には大きな流路があった

木でできた背負子(しよいこ)の部品が見つかりました。

馬の下顎(したあご)が見つかりました。首を切られて捨てられたようです。

りました。中からは土器や木製の道具が見つかりました。中には土でできた玉なども見つかり、おまともあったようです。

流路で見つかった木の道具。土を耕すクワや斧(おの)の柄、背負子の部品もありますが、中には使い方の分からないものもあります。

木器の様子です。こわれやすくなります。ムラはあります。

竪穴住居(たてあなじゅうきょ)です。大きさは16㎡くらい。屋根を支える柱穴が4つ見えます(青く着色した穴)。

2間×2間の総柱(そうばしら)の掘立柱建物です。10㎡くらいの小さな建物で、倉庫と考えられます。

何のために？まっすぐに掘られた溝

バラバラになった馬の歯が見つかりました。なにかのまじないに使ったのでしょうか？

水鳥の形をした土器。水鳥形土器は朝鮮半島でよく見られます。

古墳時代中期の初め頃(5世紀初め)の大きな溝が見つかりました。この溝は地形を無視してまっすぐに掘られています。この溝が掘られる前には、古墳時代前期の終わり頃(4世紀後半)に地形に合わせて曲がりくねった溝が掘られていたのですが、その溝までも埋め戻してまっすぐな溝を通して、何のためにこのような溝を掘ったのかは不明ですが、溝内からは馬の歯や剣形の木製品、水鳥の形をした土器など、少し変わったモノが出土しています。

すでに掘ってあった溝を埋めてまで作った直線溝。誰が何のために掘ったんだろう？

前に掘られていた溝を埋め戻したところは崩れやすくなるので、護岸(ごがん)のための杭を打ち込んでいます。

0 100m

背景に使用している航空写真は、大阪府が平成11～13年にかけて撮影したものを縮小編集したものである。